

## 第4回 日本臨床薬理学会 東海・北陸地方会を終えて

静岡県立大学薬学部

古島 大資 内田 信也 山田 浩

会期：2019年6月8日

会場：静岡県立大学 草薙キャンパス

会長：山田 浩（静岡県立大学薬学部医薬品情報解析学分野）

テーマ：チームで築く臨床薬理

### 1. 開催概要

2019年6月8日（土）に、静岡県立大学草薙キャンパスにおいて第4回日本臨床薬理学会東海・北陸地方会を開催した。本地方会は令和元年度最初の地方会ということもあり、より多くの東海地方および北陸地方の会員に参加してもらえるよう参加費を一律1000円（学生無料）と設定した。当日の参加者は、合計164名（会員73名）であった。詳細な内訳はFigure 1およびFigure 2のとおりである。

本地方会では、安全で有効な治療法の開発や医療現場での実践にあたっては、医療機関・研究機関、企業、行政といった医療現場と産官学の連携が不可欠であり、さまざまな職種がそれぞれの役割を担い協働して築き上げる臨床薬理の重要性を踏まえ「チームで築く臨床薬理」を本会のテーマとし、特別講演、教育講演、シンポジウム等に基調としてプログラムに盛り込み企画した（Table）。また、一般演題としてポスターセッションを企画し演題を募集した。一般演題の中から優秀演題賞を、本地方会の世話人による投票により決定する試みも実施した。終了後は、懇親会を開催し、参加者間で有意義な交流が行われた。

### 2. 特別講演

最初のプログラムは、大分大学名誉教授・臨床試験支援財団理事長 中野重行先生（座長：静岡県立大学薬学部医薬品情報解析学分野 山田浩 教授）による特別講演であった。「臨床薬理学の温故知新：「いのち」を守っていくために！」と題して、この半世紀の間に、なぜ「臨床薬理学」という新しい学問領域が誕生する必然性があったのか、臨床薬理学とその周辺で起こったことについて講演いただいた（Photo. 1）。また、「プラセボに関する諸問題」に焦点を当て、薬物治療効果を構造的に理解することが、人々の「い

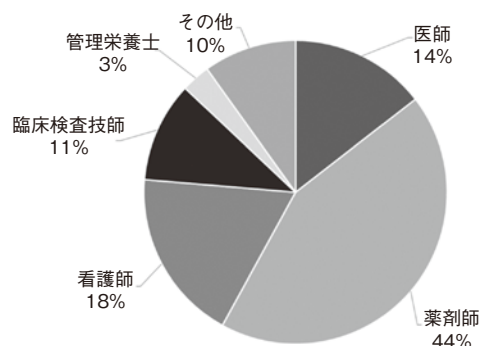


Figure 1 参加者の職種

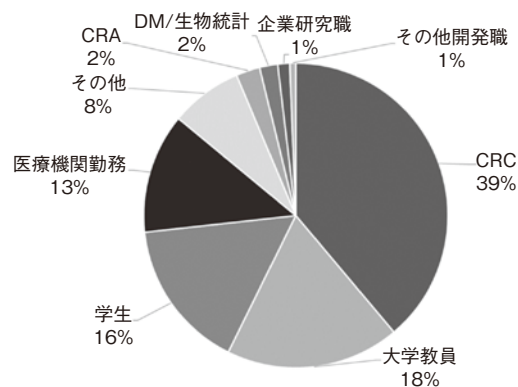


Figure 2 参加者の所属

のち」を守るためにどのように役立つかについて講演いただき、聴講者から非常に大きな反響があった。

### 3. 教育講演

教育講演では、平成30年4月より施行された臨床研究

著者連絡先：古島大資 静岡県立大学薬学部医薬品情報解析学分野 〒422-8526 静岡県静岡市駿河区谷田52-1

TEL・FAX：054-264-5591 E-mail：dfuru@u-shizuoka-ken.ac.jp

投稿受付2019年7月11日、第2稿受付2019年8月19日、掲載決定2019年8月20日

ISSN 0388-1601 Copyright：©2019 the Japanese Society of Clinical Pharmacology and Therapeutics (JSCPT)

Table 1 大会プログラム

<b>開催の挨拶</b>	13:00~13:10
大会長挨拶 山田 浩 (静岡県立大学薬学部 医薬品情報解析学分野)	
<b>特別講演</b>	13:10~14:10
臨床薬理学の温故知新:「いのち」を守っていくために!	
座長: 山田 浩 (静岡県立大学薬学部 医薬品情報解析学分野)	
講演: 中野 重行 (大分大学・臨床試験支援財団)	
<b>教育講演</b>	14:10~14:40
臨床研究法の下で実施する臨床研究	
座長: 山内 高弘 (福井大学医学部病態制御医学 血液・腫瘍内科)	
講演: 小田切 圭一 (浜松医科大学附属病院 臨床研究管理センター)	
<b>ポスターセッション</b>	14:40~15:40
<b>シンポジウム</b>	15:40~17:10
みんなで理解する薬物動態・薬物相互作用—薬物動態情報をチームで利用するために	
座長: 内田 信也 (静岡県立大学薬学部 実践薬学分野)	
乾 直輝 (浜松医科大学医学部 臨床薬理学講座)	
シンポジスト	
1. わかりやすい薬物動態・薬物相互作用の話 (教育の立場から)	
演者: 内田 信也 (静岡県立大学薬学部 実践薬学分野)	
2. 薬剤師からみた薬物動態・薬物相互作用のとらえ方とその臨床応用 (薬剤師の立場から)	
演者: 三浦 基靖 (浜松医科大学医学部附属病院 薬剤部)	
3. 薬物動態・薬物相互作用のエビデンスを診療・治療に用い、臨床から生み出す (医師の立場から)	
演者: 鈴木 啓介 (国立長寿医療研究センター 治験・臨床研究推進センター)	
4. 薬物動態・薬物相互作用の臨床試験を支援し、実施する (CRCの立場から)	
演者: 木山 由実 (浜松医科大学医学部附属病院 臨床研究管理センター)	
<b>閉会式</b>	17:10~17:20
次回地方会大会長の挨拶 山内 高弘 (福井大学医学部病態制御医学 血液・腫瘍内科)	
<b>懇親会</b>	17:30~19:30



Photo. 1 特別講演の風景



Photo. 2 教育講演の風景

法に関して、「臨床研究法の下で実施する臨床研究」と題して、浜松医科大学医学部附属病院での臨床研究法対応の1年間を振り返り、今後いかに臨床研究を活性化していくかについて、浜松医科大学医学部附属病院臨床研究管理センター 小田切圭一先生(座長:福井大学医学部病態制御医学講座血液・腫瘍内科 山内高弘 教授)に講演いただいた(Photo. 2)。医療現場での混乱や研究責任医師、CRC等の研究支援部門の苦慮等も盛り込まれ、講演後、活発な質疑応答が展開された。

#### 4. ポスターセッション

ポスターセッションでは、臨床、基礎薬学系など幅広い分野の研究者、実務者、学生から23の発表演題が集まり、それぞれ活発な討論がなされた(Photo. 3)。発表演題のうち優秀演題として得票数上位3演題を世話人会の会員より投票し決定した。優秀演題賞受賞者は、山田悠人氏(岐阜大学医学部附属病院薬剤部)、田中紫菜子氏(静岡県立大学薬学部実践薬学分野)、神谷大地氏(静岡県立大学薬学部臨床薬剤学分野)、上森将吾氏(岐阜薬科大学薬学部実践社会



Photo. 3 ポスターセッション風景



Photo. 4 優秀演題賞受賞者



Photo. 5 シンポジウム風景



Photo. 6 シンポジウム風景 (質疑)

薬学研究室), 五十嵐敏明氏(福井大学医学部附属病院薬剤部)が選出された(得票同数のため5名受賞, Photo. 4)。

## 5. シンポジウム

シンポジウムでは、「みんなで理解する薬物動態・薬物相互作用—薬物動態情報をチームで利用するために」と題して、医療現場で活躍中のさまざまな職種の先生方をシンポジストとして、薬物動態・薬物相互作用についてわかりやすく解説いただき、聴講者との活発な議論が展開された(座長:静岡県立大学薬学部実践薬学分野 内田信也 准教授, 浜松医科大学医学部臨床薬理学講座 乾直輝 准教授)(Photo. 5, 6)。

教育の立場からは、静岡県立大学薬学部実践薬学分野の内田信也先生に、薬物の投与から吸収、分布、代謝、排泄までの過程について、さらに薬物の投与後に生体内にどの程度存在するかを推測する薬物動態学パラメーターについてわかりやすく解説いただいた。次に薬剤師の立場から、浜松医科大学医学部附属病院薬剤部の三浦基靖先生に、薬剤師からみた薬物動態・薬物相互作用のとらえ方とその臨床応用として、実際の症例を用いた薬剤部での業務や臨床研究について説明いただいた。次に医師の立場から、国立

長寿医療研究センター治験・臨床研究推進センター治験・臨床研究推進部長の鈴木啓介先生に、薬物動態・薬物相互作用のエビデンスを診療・治療に使い、臨床から生み出す、として臨床薬理の専門医として診療・治療に関与した経験に基づく、薬物動態および薬物相互作用のエビデンスが主に脳神経内科における実臨床の場でどのように活用されているのか、実例を交えながら紹介いただいた。最後にCRCの立場から、浜松医科大学医学部附属病院臨床研究管理センターの木山由実先生に、過去に実施した薬物動態・薬物相互作用を評価する第I相試験の経験をもとに、当該試験を支援するCRCに求められる役割や薬物動態・相互作用試験を実施する際の準備や煩雑なスケジュールへの対応、現場で起こりうるトラブルなどの経験と解決方法を説明いただいた。シンポジウムでは聴講者からは実務的な質問や現状等について活発な討論が行われ、薬物動態学についてより身近に感じるようになったのではないかと考える。

## 6. おわりに

本地方会では、新たな試みの一つとしてポスターセッションにおける優秀演題賞の選出を企画した。その影響もあったのか地方会規模としては比較的多くの演題が集ま



Photo. 7 第4回日本臨床薬理学会東海・北陸地方会 運営スタッフ

り、また趣向を凝らしたポスターや積極的なディスカッションが見受けられ、企画が成功したと考えている。

次年度の第5回日本臨床薬理学会東海・北陸地方会の大会長は、福井大学医学部病態制御医学講座血液・腫瘍内科の山内高弘教授と決定しており、今年以上の盛会となることを祈念するとともに、本地方会および本学会の更なる発展に貢献していけるよう尽力してまいる所存である。

地方会の前日に静岡市が梅雨入りし、当日の天候が危ぶまれましたが、幸いなことに晴天に恵まれ多くの方々に参

加いただき大変感謝申し上げます。また、予算の都合上、計画から準備、当日の運営に至るまで、できるだけ自分達の手で実施する必要があったため、行き届かない点多々あったかと思われませんが、無事に本会を終了できたことは、事務局スタッフや関係者の協力のおかげであり、ここに深く感謝申し上げます。

末尾になりますが、開催のお手伝いをいただきました本学薬学部医薬品情報学分野および実践薬学分野の学生諸君、本学薬学部教員、ならびに公益財団法人するが企画観光局をはじめとする関係各位に心より感謝申し上げます。